尼崎市立教育総合センター

教育情報コーナーからのお知らせ

9月号

酷暑の夏も終わり、さあ２学期のスタート。学校は子どもたちの元気な挨拶と明るい笑顔でいっぱいですね。
でもおや、いつもとちょっとちがうぞ？いろいろな形で表れる子どもたちの変化。
子どもたちの生活態度や言葉づかいを見直してみましょう。早めの対処で乗りきって。

欧米文化における「魔法のことば」

ヨーロッパ・アメリカの文化においては、「マジック・ワーズ」ということばがある。

そこでは、子どもたちは幼い頃から、家庭や学校でマジック・ワーズつまり「魔法のことば」を教えられて育っている。

マジック・ワーズとは、「サンキュー」と「プリーズ」の2つのことばである。

たしかに、彼らは社会生活のなかで、これらをじょうずに使う。

家庭でも職場でも、ショッピングでもレストランでも、大人子どもを問わず、みんな当たり前のように自然に使っている。

洋画のなかで、子どもが「サンキュウー・ダディ」「サンキュウー・マミー」というのは、ごく自然な会話である。

それに比べると、日本人はどうだろう。

残念ながら、わたしたちは、この「魔法のことば」をうまく使いこなす言語の習慣をまだもっていない。

国際社会といわれる21世紀には、学校でも家庭でも、これらをじょうずに使える日本人をめざしたいものである。

もちろん、日本にも、「ありがとう」「どうぞ」「すみません」の3つをみんなで使おうと運動をはじめている学校がある。

オアシス運動といって、「おはようございます」「ありがとう」「失礼します」「すみません」という声かけを推進している学校がそれである。

子どもや教師の間に、これらのことばがいっぱいあふれている学校は、それだけで豊かな情操が育っているのだろう。

また、総合的学習では、子どもが校外に出かけるフィールドワークが多くなるが、こうした活動が多ければ多いほど、これらのことばが自然に口から出る習慣が必要になる。

ここで正確な理解のために断っておきたいが、欧米人は、「サンキュー」や「プリーズ」ほど、「エクスキューズミー」ということばを軽々しく使わない。

電車や街で通りすがりに肩が触れたときなど、ちょっとしたことには、すすんで「エクスキューズミー」や「ソーリー」というが、一方で、自分が責任をとらなければならない事態に発展するかもしれない重要な問題になると、彼らは軽々しくそうは言わない。

契約社会においては、一方的に自分の非を認めれば、とんでもない責任問題に発展することだってあるからである。

欧米の家庭や学校では、社会生活の潤滑油としてはたらくことばの大切さを教えるとともに、社会生活なかで自己を守る実際教育もまたおこなっている。

子どもの教育を考えるとき、わたしたちは聞こえのよい美談だけではなく、美醜をふくめた人間社会の全体に目を向けたいものである。

長瀬荘一著『子どもが勉強したくなる授業の条件』より